

たゞ、めざましきものにおとしめそねみ給、おなご程それより下らうの更衣たちは、まじてや  
ずがらず、朝夕のみやづかへにつけても人の心をうごかし、うらみをおふつもりにやありけむ、  
いどあつしくなりゆき、もの心ばそげにさどがちなるをいよ、あはれなるものにおぼして、  
人のそしりをもえは、からせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり、

〔源平盛衰記〕清盛息女事

御娘八人御坐ケルモ、皆取々ニ幸シ給ヘリ、○中七ニハ安藝嚴島ノ内侍ガ腹ノ娘也、指タル才藝  
ハナカリケレ共、美貌ハ人ニ勝給ヘリ、嬋娟タル兩鬢ハ秋ノ蟬ノ翼宛轉タル雙蛾ハ遠山ノ色ト  
ゾ見エ給エ、秋夜月ヲ待、ハツカニ山ヲ出ル清光ヲ見ガ如シ、夏日蓮ヲ思初テ、氷ヲ穿紅艶ヲ見ヨ  
リモ潔シ、此御娘十八ノ年、後白河院ヘ參給ヘリ、更衣○平后ニテゾ御坐ケル、入道○清盛サシモナキ  
事セラレタリト申合ケリ、其上程ナク失給ニケリ、  
〔増鏡五内野の雪〕○仁治より、中宮○藤原は、いつしかたゞならずおはします、六月○寛元にな  
りて、○中十日のあけぼのよりその御氣しきあれば、殿のうちたちさわぐ、○中内○後には更衣  
ばらに、わか宮二所おはしませど、此御事をまぢ聞え給ふとて、坊さだまり給はぬほどなり、